Akita University

評価委員からの寄稿

評価業務への思いと大学ＩＲへの決意

教育文化学部教授　上　田　晴　彦

私が評価業務に初めて出会ったのは、今から10年ほど前にさかのぼる。学部での教員評価をWebベースのシステムでおこなうにあたり、その支援をおこなうというのが当時の私の主な業務であった。かなり昔のことなので詳しくは覚えていないが、その頃は評価というものに特段の思い入れなど全くなく、淡々と業務をこなしていたと記憶している。

そのような私が評価というものを大きく意識するようになったきっかけが、評価担当の学長補佐として、平成23年度から全学の評価センターの業務に関わったことであった。その際の主な役割は、平成25年度に受審することが決まっていた認証評価への対応であったが、事務方と苦労して自己評価書を書いたことは今でもはっきりと憶えている。その後一時期全学の評価の仕事を離れることもあったが、平成27年度の途中から再度評価センターに関わることになり、第２期の中期目標・中期計画の取りまとめに奔走した。

評価センターでの業務に関わって以来、常に考えていたことは「評価業務とは何か」ということである。最初の頃は、各部局から提出された自己評価書を統一のとれたものにまとめ上げるのが評価センターにおける評価業務である、と単純に考えていた。ところが認証評価の受審を通して、そのような考え方では評価業務を十分に遂行しているとは言えないのでは、と思い至るようになった。近年の大学における教育・研究は、極めて大きな変貌を遂げつつある。経済停滞のなかで研究費が伸び悩むにもかかわらず研究内容は高度化しており、さらにきびしい国際競争にさらされている。また国際競争力の確保等の国家戦略により、大学教育も大きな変革を受けざるを得なくなっている。このような状況下で、大学評価の観点は教育・研究の大変革に対応して日々変わっていく。評価業務とは常日頃から大学評価の動向をリサーチすること、そして新たな評価項目が出現した場合には、その対応について各部局に積極的に注意喚起することを含むものである。要は大学評価を戦略的に考えていく必要があるというのが、現在の私の考えである。

評価業務についての一定の認識を持つようになった矢先、平成29年度から評価センターは評価・ＩＲセンターに改組され、従来の評価機能に加え新たにＩＲ機能を備えた組織となった。そのため大学ＩＲについて私なりに少しずつ勉強しているつもりであったが、最近少しショックを受けることが続いた。ＩＲ業務を始めるにあたり、学外の専門家に来ていただいたり、我々が出向いて行ったりして教えを乞う機会があったが、先進的な取り組みをおこなっている組織との体力差に戦慄を覚えた。53歳からＩＲについて学び始めるのはつらい部分もあるが、「50の手習い」という言葉もある。今後数年内に先行している他大学に少しでも追いつけるよう、日々努力を重ねていきたい。